福島大学附属図書館報

書燈

No.44　2010.4.1 発行

〒960－1293　福島市金谷川1番地
TEL（024）548－8087
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
福島大学附属図書館

技術と文字情報

附属図書館長　高橋　隆行

本の買い方が、ここ10年の間に急激に変化してきている。研究室の学生が本を買う時に真っ先にチェックするのはインターネット上の書籍販売サイトであり、研究室で使うゼミの本を私が学生に指示する時も、書名や著者名ではなくて同じ書籍販売サイトの当該書籍へのリンクだったりする。急いでいるときは、特にその傾向が強くなる。近所の本屋まで出かけて行き、そこで探したり注文したりするよりも、コンピュータの画面でちょいちょいとボタンをクリックしてしまった方が、結局のところ速くて確実なのである。唯一の難点は、中身の確認が難しいことであろうか。書籍店の方には申し訳ないが、大都市への出張の際に、専門書の在庫が豊富な書店に寄って、将来に備えた情報を仕入れる（つまり立ち読みする）というようなことも時々している。

読み方・使い方にも大きな変化がある。本学には4000人超の学生が在籍しているが、その内の果たして何人が、分厚い英和辞典を鞄に入れているだろうか。私が初めて外国出張をしたのはもう20数年前のことであるが、その時は、街中の本屋を渡り歩いて、大きさと重さと中身を比較して最も良いポケット型の辞典を求めたことを思い出す。今は、それこそ紙で持てば数キロ・グラムにもなるような辞典の束を、数百グラムの携帯端末の中に押し込んで持ち歩くことができるし、必要であれば、本人が発音しなくても、機械が適当に（いや極めて正確に）発音して何とか用事を済ますこともできる。いま、アパートで新聞を定期購読している学生はほとんどいないであろう。インターネット上に各紙が電子版を公表しており、それで事足りてしまうからである。20数年前の外国出張の際は、帰国の飛行機の中で日本語で書かれた新聞を久しぶりに手にして浦島太郎になったような気分を味わったものであるが、今はホテルでパソコンに向かえば、日本の新聞をほぼリアルタイムで読めてしまうので、帰りの飛行機で新聞を手にすることはほとんど無くなってしまった。

こうした事情を「活字離れ」と表現する向きもあるようであるが、実は逆で、人類の文字情報に対する熱意と欲望が、これらの新しい技術や媒体を産み出しているということのように思う。20年前と比較して、確かに紙媒体の文字を読む機会は減少したが、電子媒体の文字は大量に読んでおり、むしろテレビの視聴時間の方が減少している。私が所属する学会でも、論文集は基本的に電子媒体に移行してきており、発行から数年経過したものは、会員でなくとも自由に閲覧できるようにするというのが昨今の流れである。紙媒体よりも電子媒体の方が発行にかかるコストと時間が節約できるという発行側の事情もあるが、一方で、人類の知の財産であるそうした研究成果が、一般の人でも、その気さえあれば自由に直接触れることができるというのは、素晴らしいことだと思う。

かつて、本は書き写すものであった。紀元前300年頃に建設されたアレクサンドリア図書館では、この写本によって世界中からあらゆる分野の本を集めて収蔵し、一大学術機関となっていた。その後、中国で発明された活字は、15世紀中頃にドイツで活版印刷技術として大きく発展し、知の普及に大きな貢献を果たした。そして現代、コンピュータやインターネットという新しい技術は、文字情報の入手や使い方に利便性を与えるのみならず、あらゆる人に文字情報を発信する機会を与えることとなった。これは、これまでの活字・出版技術には無かった特性であり、このような新しい“活字技術”を得て、今後これをどのように使いこなしながら人類の知が高まっていくのであろうか。とても楽しみである。

図書館と「情報」のカタチ

経済経営学類　菊池　壮蔵

1.　「情報」の現代

久しぶりに、一年生向け「教養演習」を担当することになり、テーマを「情報」に定めた。今なお「情報」という言葉を聞くと、判で押したようにコンピュータの分野だと思いこんでいる旧世代的「偏見」(あえてそのように表現する)や、そこに囚われている情況へのアンチを含んでのことである。いわゆる「高度情報化」時代、書籍や論文の形が電子化され、PCだけでなく「電脳板」などのモバイル型の電子機器によって「いつでも、どこでも」読むことができるようになりつつある。「ぐぐる」(ネットで検索する)ことで、大抵の知りたい「情報」(実は、「ガセネタ」や情報操作目的の「情報」も含まれているのだが)に容易にアクセスできる。高校までの「情報教育」は、現状ではおそらく最低限こうした「情報」へのアクセス方法を教えるのが精一杯なのかもしれない。NHKの高校講座などの番組では、大学での一般的情報教育以上の深い内容を提供しているが、どこの学校でもそれが可能な状況にはなっていないだろう。しかし、「ディジタル・ネイティヴ」世代は、学校で教えられるものを遙かに越えた世界の住民である。だが、その一方でネット世界を「現実」「事実」として理解する傾向もあり、一昔前だと「テレビでも紹介された○×」というところを、「ネットにも出ていた○×」のような言い回しでフツーに語られるほどである。最近では、提出されたレポートの出典にURLを示す例が当たり前のようにみられる。たとえURLであっても、出典を明記してあればまだましな方で、蔓延する「コピペ」の弊害は、NHK/TVの番組「クローズアップ現代」で取り上げられるほどに、教育界での深刻な問題になっている現実もある。

こうしたなかで、私の教養演習テーマの「情報」は、データ処理やインフォメーション収集ばかりでなく、インテリジェンスとしての情報についても縦横に体験してもらおうとの企画であった。幸い、学生諸君から一定の好意的評価をもらったので、この経験のなかから今回は、附属図書館に関わる部分について紹介してみたいと思う。

2.　書籍それ自体がもっている「情報」

確かに、どこの授業でも出来るようなものではないのだが、本学附属図書館の宝物の一つであるフランス百科全書の現物を、鍵付きのガラスケースから取り出して、学生諸君に実際に触れる体験をしてもらった。重厚な皮革表紙を撫で回し、匂いを嗅ぎ、これを開いて百数十年前に印刷された紙の感触を確かめながら、ページに指を触れて直になぞってみる。と、紙面に微妙な凹凸(おうとつ)があるのを感じることが出来る。文字の部分がへこんでいるのだ。これは印刷が凸版印刷(活字を組んで印刷する)によるからである。ところで、この『百科全書』本編には、今日の百科事典のように挿絵がいっさいない。図版は別巻で準備されており、これらの図版群は18世紀の科学・技術の図像、農工業など産業全般の具体的姿までも、文字だけでは説明しきれない部分を生き生きと提示して見せる(経済史などの講義用資料として使えそう!)。これらの細密な図版は銅板画(エッチング)によって印刷されている。エッチングは銅板上に細かい針で溝を掘ることによって描かれる。この溝に流し込んだインクを紙に転写するのであるから(凹版印刷)、注意深く印刷面を触ってみてもへこんではいない。インク部分の微妙な盛り上がりがわかる場合もあるが、普通はそこまではわからない。そのかわりページの周辺部分に銅板の原盤が紙に押しつけられた際に出来た枠の跡がくっきりと残っているのがわかる。文字の印刷と図画の印刷とが、技術的に全く異なった方法で印刷せざるをえない以上、文字と挿絵とを同一ページに混在させることが難しかった事情がこのことによってわかるのである。今日では

当たり前のように見かける挿絵入りのページは、19世紀になって、「木口版画」（こぐちはんが:堅い材質の木を輪切りにし、年輪の出た面を磨いて精密に彫り込むの技術）が本作りに応用されてから一般的になるのだ。

念のため、本学所蔵の『ブリタニカ』百科事典の初版本（エディンバラ、1773年）のリプリント本と比較をしてみる。この本は現代の写真製版技術によって複製されているので、当初に刊行されたままの「姿」を我々に示してくれる。扉ページの出版地・発行年もそのまま印刷されており、リプリント版であるとの印字はどこにもない。印字された文字情報からみる限り、オリジナル本との区別はつかない。しかし、この本を開いて、任意のページを指でなぞってみると、すべすべ・つるつるで、いっさいの凹凸が感じられない。たぶんオフセット印刷だろう。紙質も18世紀に漉かれたものと比較すると、あきらかに現代紙のように思われる。文字情報ばかりでなく書籍の形態や形状もそれ自身が明らかに「情報」を発信していることがこれでわかるのである。指先の感触だって、有力な「情報」収集の手段になりうるのだ。電子的テキストデータや画像データでは、こうした「情報」の奥行きは伝わらないのである。

3. 「サッカー禁止法」が語るもの

さて、この貴重図書室での授業ではもう一つのテーマがあった。文字情報の内容と解釈に関するものである。

この部屋には『本王国法令集』"Statutes of the Realm"や『スコットランド議会制定法集』"Acts of Parliament of Scotland"などが所蔵されている。いずれも19世紀以前に刊行されたものだが、イングランドやスコットランドで制定された中世以来のすべての法令をここで確認できる（これらも実際に手を触れてもらったが）。このうち、『スコットランド議会制定法』には索引がついていて、スコットランド研究を専門としてきた私にとっては、色々お世話になっているしろものである。だから、そこにfootballの項目が載っていることについても、記憶に残っていた。私の直接の研究対象からすれば、本筋からは離れていたが、興味を引かれたので寄り道・道草でチェックしておいたからである。これが、教材となった。

その内容は以下のようなものであった。早くも1424年にサッカー禁止令が公布されており、しかも、1457年に再び禁止法が成立し、さらに3回目の禁止法も1491年に成立していたのである。日本でいえば、室町時代のことである。法文の内容は、中世英語のスペル、語法で書かれているので読みづらい（footballがfutbalのように表記されているので普通に辞書で引いても出てこない）のであるが、それぞれ禁止の理由が述べられている。早い話、「日頃から弓術など武術の訓練を怠らないようにすべきなのに、これを忘れてフットボールやゴルフに熱中してけしからん」、というのが制定の理由として述べられている。

まあ、わからんでもない。そこで、学生に質問する。「だが、なぜ同じような法律が3度も出ているのか?」と。法律文面の資料そのものが語るのは、サッカーが法律で禁止されていた、というものである。一瞬、皆が考え込む。そこで私は言う。歴史家はこれを、法で禁止しても効果がないほど、相変わらず盛んにサッカーが行われていた証拠として判断するのだよ、と。繰り返し禁止令が出されているという事実の中に、法による禁止という個別情報を越えたメタ情報（＝禁止法が効力を持ち得なかったという情報）が含まれているとするのである。その事実は文面の情報のなかには含まれていないので、見落とされがちな「情報」であって、その限りで、この「情報」は単なるインフォメーションからインテリジェンスへと昇華されていることになる。データを直接扱う分野では、ともすると意識され難いこうした思考手続きは、人文系の学問（特に資史料を扱う歴史関係の領域）のなかでは、常識とされている作法である。これは「テキスト・クリティーク」「史料批判」と呼ばれているものであって、あらゆる状況の中で必要とされる「行間を読む」能力とは、そうしたものをいう。大学で学ぶべきキホンはこれなのだ、と私は常々思っている。

ネットで読む論文 「FUKURO_フクロウ_」学内教員研究成果公開

http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/

【FUKURO_フクロウ_とは】　福島大学学術機関リポジトリ（FUKushima University RepOsitory）の愛称。福島大学の構成員による研究成果（教員が書いた論文など）を、インターネットを通じて広く国内外に公開するためのシステムです。

永幡幸司
『音環境の政治的正しさをめぐって』

騒音・振動研究会資料 2008, N-2008-50
URI:http://hdl.handle.net/10270/3330

良好な音環境で生活をしたい。この願いには、一定以上の聴力を保持するものであれば皆、同意することであろう。では、良好な音環境とは、どのようなものだろうか。この問いに答えるのは、実は、とても難しい。同じ場所に対してであっても、立場が異なれば、音環境に求めるものは異なってくるからだ。

様々な立場の人が集まってくる公共空間においては、立場の異なる人々から、それぞれの立場における「良好な音環境」を求めた、様々な要望が出される。公共空間の音環境は、これらの要望が適切に考慮されたデザインがなされる必要がある。

ここで、これら要望の間に共通部分があれば、話は簡単だ。共通部分の枠内でデザインすればよい。しかし、要望間に対立が含まれている場合、それらの調整は困難だ。そして、現実の公共空間の音環境においては、このような困難に直面することが少なくない。

このような困難な状況において、音環境に対する要望の調整を図っていくためには、それぞれの立場間の関係を整理するための、メタレベルの視点が必要となる。そのようなメタレベルの視点の１つとして、この論文で採用されたのが、「政治的な正しさ」という概念である。

政治的正しさとは、言葉、表現、行動などが、公正さを期したものであること、差別的ではないことを意味する概念である。この概念は、本来的には、非排他的であり、反覇権主義であり、開かれた議論が行われることをその理念とするものである。その理念から、障害者問題を含む、少数者の問題を考える際に援用されてきた。

この論文では、環境影響評価における音環境の評価、ハイブリッド車の走行音、音響式信号機、街頭宣伝放送という４種の実際の音環境の問題を題材に、それぞれの問題に対する様々な立場の要望を、政治的正しさという観点から吟味し、それぞれの問題に対する公正な解決策を模索している。

例えば、皆さんよくご存知であろう音響式信号機（歩行者用信号が青の際に「ピヨピヨ」あるいは「カッコー」と鳴る、音の出る信号機）については、次のように論じている。音響式信号機の音量が小さすぎると、視覚障害者が安全かつ安心に横断歩行をする権利を疎外する。その一方で、音量が大きすぎると、周辺住民の静穏権を犯す。そして、視覚障害者が望む音量を満たすと、周辺住民の静穏権が侵害されてしまう関係にある。そのため、どちらか一方の要求を完全に取り入れた場合、他方にとって政治的に正しくない音環境となってしまうし、両者に妥協を求める音量設定をした場合、部分的とは言え、両者の権利を抑圧することになる。このような場合、そもそも、現行の音響式信号機が不適切な方式であると考えるのが妥当であろう。エスコートゾーン（横断歩道に設置するための点字ブロック）など、視覚障害者の横断歩行を支援する、新たな有効な方法が開発されているので、現行の音響式信号機の方式に拘る必然性は、もはや、ない。

音環境に対する具体的提案（特にバリアフリーの文脈における提案）は、ある特定の視点からのみ検討されたものが少なくない。音響式信号機はその典型である。しかし、そのような特定の立場にのみ呼応した提案は、それが対象とする立場の者の要望を局所的には満たすかもしれないが、環境全体を視野に入れると、問題を横にずらしたに過ぎない。

音環境の政治的正しさを追求することは、音環境に対する多種多様な要望が共存できる環境の構築を目指すことである。その実現のためには、多種多様な要望を包括的に検討することが欠かせない。このような検討を可能とするための、当事者参加の実現が求められている。これが実現されたとき、冒頭の願いは、実現されることであろう。

海外の図書館事情～ドイツの文書館～

経済経営学類　森　良次

毎年夏休みにドイツを訪れ、図書館や文書館でドイツ経済史の研究に必要な歴史資料の調査を行っている。ここ数年はドイツ西南部のバーデン・ビュルテンベルク州Baden-Württembergにある「ルードビヒスブルク・州立文書館」Staatsarchiv Ludwigsburgを訪問するのが恒例となっており、150年ほど前のこの地域に生きた、歴史に名をとどめることも希な人々の経済活動の足跡を明らかにする作業にあたっている。

文書館といっても、日本では宮内庁役人の手記や日米外交文書（核密約問題など）が時折新聞で話題になるくらいで、一般にはあまり馴染みのない存在である。だが、全国には公立施設を中心に相当な数の文書館が存在し、歴史的価値の高い公文書や為政者の文書が収集・保存されている。ドイツには国立（連邦）や州立の機関の他に、基礎自治体が整備した文書館が実に多くある。人口10万人以上の都市であれば、ほぼ確実にアーキビストを何人も抱える立派な文書館があると考えてよい。ドイツは、歴史資料を体系的に収集・保存・活用することにおいて世界最高水準にある。

そのドイツの文書館を利用するたびに思うのは、利用者が実に多いということである。ルードビヒスブルク・州立文書館では、歴史学を専攻する学生や大学の歴史研究者の他にも、恐らく年金生活者であろう年配者の姿をよくみかける。まだ職業生活から引退するには明らかに早いと思われる「働き盛り」世代の利用者も多く、自身の史料調査の傍ら「この人は昼日中に仕事もせず、一体何を調べているのだろう」「きっと大学出の失業者に違いない」「いやバカンスを利用して歴史学を専門とする高校の先生が研究活動に励んでいるのだろう」などとつい想像してしまう。ドイツでは年齢、職業など多様な属性をもった人々が大学で学んでいるが、文書館にも様々な人が通い、手書き文書に熱心に目を通している。

文書館を利用するのはこうした歴史資料の利用者ばかりではない。ルードビヒスブルク・州立文書館では、定期的に（あるいは希望に応じて）小・中・高校生や歴史好きの市民を対象にゼミナール、講演会、展示会を開催しており、夏休みにはよく子ども達が史料閲覧室にやってきて、アーキビストの説明に耳を傾ける姿を目にする。文書館の現場を見学することを通じて、子ども達はかつて人々がどのように生活をし、現代に生きる我々はそれについてどのように情報をえることができるのか、といったことを学ぶのである。この他にも歴史文書に残されたレシピから貧民のスープを再現してみるゼミナール、旅行鞄一つで郷里を離れた移民の心性を手記から探り、今日の移民と比較してみるゼミナールなど、文書館ならではのゼミナールが催されている。これらは歴史、社会、語学（特にラテン語とフランス語）など学校の授業の一環をなしているようでもある。

文書資料を扱うか否かという違いはあるが、ドイツの文書館は、博物館と同じように市民の生活の中にしっかりと位置づいており、歴史に学ぼうという社会全体の姿勢が感じられる。

図書館新着情報

利用者サービスチーム

キャンパス内のパソコンから
図書館ホームページにアクセス！
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/

●19c/20c HCPP(19/20世紀英国下院議会文書データベース)登場！

英国及び周辺諸国の歴史・政治・外交・経済・社会を研究する上で不可欠な議会文書を検索して閲覧することができます。

●聞蔵Ⅱビジュアル(朝日新聞記事データベース)バージョンアップ！

これまでの内容に加えて、「明治・大正・昭和(戦前)版」[1879～1945年]と「人物」情報を追加しました(同時接続1ユーザ)。

学内教員著作寄贈図書

『核兵器と日米関係』

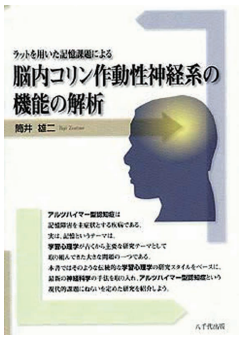
有志舎　2006.3
黒崎輝著
サントリー学芸賞受賞

過去数十年間、日本は被爆国の立場から非核三原則を「国是」としてきた。その一方で日本は、米国が提供する「核の傘」に依存してきた国でもある。このような日本の核政策はどのように形作られたのか。とりうる選択肢はそれ以外になかったのか。本書は、こうした疑問に答えるため、いまから50年前に遡って日米関係を歴史的に考察している。

1960年代、中国がアジア初の核保有国となり、国際社会では核保有国の増加が懸念されていた。本書の特色のひとつは、このような状況において米政府が日本を対象として展開した核不拡散外交を実証的に解明した点にある。当時、日本は経済力・技術力を高めており、米政府にとって日本が非核保有国の地位にとどまることは決して自明ではなかった。

事実、日本には多様な政策の選択肢があった。しかし、結局、米国の「核の傘」の下で非核三原則を堅持するという現在の日本の核政策が確立され、日本は米ソ主導で成立した核不拡散条約に加盟した。本書は、史料に基づいて日本の核政策の形成過程を新たな視点から検討し、それが被爆経験の当然の帰結でも、状況に強いられたものでもなく、日本の主体的な選択であったと論じている。

歴史に関心ある読者はもちろん、今日の核問題や日米関係に関心ある読者も、本書から少なからぬ知的刺激を得られるだろう。



『ラットを用いた記憶課題による脳内コリン作動性神経系の機能の解析』

八千代出版　2008.9
筒井雄二著

記憶というテーマは、心理学の一分野である学習心理学が古くから主要な研究テーマとして取り組んできた大きな問題である。本書では伝統的な学習心理学の研究スタイルをベースに、最新の神経科学の手法を取り入れ、アルツハイマー型認知症という現代的課題の解決にねらいを定めた。本書は一見すると医学関係あるいは生物学関係の書物と思われるかもしれない。たしかに脳や神経、薬物などの話が多いことからするならば、医学や生物学の内容であると思われても仕方がない。だが、本書でもっとも重点をおいているのは、記憶の測定あるいは記憶の評価という側面である。そのような問題こそ、心理学のもっとも得意とするテーマであり、かつ、医学や生物学の領域ではほとんど扱われてこなかった未解明のテーマなのである。アルツハイマー型認知症という現代的課題に対して心理学という学問がいったいどのように闘うことができるのか、ご覧をいただけたら幸いである。

『連結財務諸表：要説』

同文舘出版　2009.7
菊谷正人，吉田智也著

本書は、わが国の連結財務諸表制度に関して、平成22年4月1日以後の連結会計期間に適用される企業会計基準第22号「連結財務諸表に関する会計基準」を中心として、連結会計全般にわたる解説を行った学習書である。学習効果を高めるために、具体的な数値例・仕訳例および数多くの設例を設け、難解な内容を容易に理解できるように図表も多用するなど、随所に工夫を凝らしている。

今後、わが国における「国際会計基準・国際財務報告基準」への対応についても、情報提供機能の強化および国際的な比較可能性の向上の観点から「連結先行」の考え方（連結財務諸表に係る基準を個別財務諸表に先行して機動的に改訂・導入しようとする動き）が見られる。

このような状況において、将来的に「会計人」を目指す学生は、連結財務諸表を適正かつ迅速に作成でき、その内容を理解していなければならないと考えられる。本書を通読し、連結会計に関する知識を大いに深めていただきたい。

こんなものがあったのか!

『怖い絵』

附属図書館　泉田　絵美子

ふと目を奪われてしまう、そういうものが存在する。それは物であったり風景であったりあるいは文字であったり、何であってもそうなり得ると思うのだが、大抵の場合は自分にとって魅力的に映るものだからであろう。その反面、見たくないと感じているのに目が離せなくなってしまう…、そんな経験はないだろうか？私にとってそれは絵であり、しかも“怖い”だとか、“不気味”だとか、そんな言葉が似合うような絵なのだ。

私は絵についてすごく詳しいというわけではない。だが、最近になって美術関係の雑誌に興味を惹かれ、手に取ってみることが多くなった。大体はパラパラとページをめくり、気になった絵があるとそのページを読んでみる程度なのだが、時たま自分がどこにいるのか忘れる程惹き込まれてしまう絵に出会うことがある。好きな作家の絵、綺麗だと感じた絵、…は勿論なのだが、前述のような絵にもどうしようもなく惹かれてしまうのだ。それも単なる怖いもの見たさという気持ちではなく、目を逸らしたいのに出来ない、怖い…けど綺麗だとか、自分でもよくわからない気持ちになるから困ったものである。

『怖い絵』
朝日出版社　2007.7
中野京子著
請求記号：723/N39k

そんな時に、これまたタイトルに“目を奪われて”借りてみたのが、『怖い絵/中野京子著』だ。これだけ見ると、タイトルそのままの内容を思い浮かべるだろう。実際私も、どんな恐ろしい絵が紹介されているのだろうと思いながら読み始めたのだが…。載っているのは、美術の教科書で目にしたことのあるような有名な絵から、観たこともないし、作家の名前すら知らないようなものなど様々だ。確かに、見るからに怖い絵もある。…あるにはあるのだが、中にはどこが怖いのか「？」となってしまう絵や、スケッチのような簡素な絵も紹介されていて、「怖い絵=血や死体などを扱ったおぞましい作品」を想像しながら読むと拍子抜けしてしまうかもしれない。そんな作品それぞれの持つ“怖さ”を、技法の面からだけでなく、作家の生い立ちや時代背景などを踏まえながら、様々な側面から読み解いていく…、こんな内容の本なのである。

特に“怖い”と感じたのは、ある出来事でがらりと作風が変わった作家の生涯を知った時だ。恥ずかしながら中学・高校の美術の試験は丸暗記でやり過ごしていた私には、新鮮な驚きであった。同じ人が描いたとは思えない程の変化ぶりに、何があったのか、どのようなものを視たのか…。そして何を感じて生き、作品を残し続けたのかと考えた時、何より恐怖を覚えた。

しかし、この本の魅力は怖さを感じるところだけではない。勿論、何とも感じていなかった絵にじわじわとした恐怖を覚えていくのも醍醐味の一つではあろう。だが逆に、ただただ怖いと思っていた絵が哀しく感じられたり、身近なものに思えたりと、「自分には縁がない、理解できない」と思っていた絵に対して親しみを覚えた作品もいくつかあった。このように読む前と読んだ後では、同じ絵であっても見方が全く変わってくる事や、自分の視野が広がったことを感じられる所が、最大の魅力なのではないだろうか。しかも、堅苦しい解説書などとは違って、エッセイを読んでいるような気軽さで読んでいけるので、「絵画なんて難しくてよくわからない」と思っている人にこそお薦めできる一冊である。もしこの本を手に取っていただいた時には、各章の始めに紹介されている絵をさらっと読み飛ばしたりせずに、まずはじっくりと見て、自分なりに何かを感じてから章を読み進めていってほしい。そして解説を読んだあとにもう一度その絵を見返し、どのように感じるようになっているか、その変化を楽しんでみてもらいたいと思う。

カウンターの内側から

人間発達文化研究科　2年　赤井　めぐみ

私は昨年の四月からこの福島大学附属図書館のパート職員として平日の夜間と休日にカウンターの業務にあたっています。本の貸出・返却はもとよりその他、ほとんどの業務をカウンターで行っています。初めの頃は緊張もあってか、カウンター越しから図書館の様子に目を向ける余裕はなかったように思います。これまで本の貸出や返却の際に一利用者としてカウンターの様子を垣間見ることはありましたが、その業務に携わる立場から改めて見る図書館の景色はどこか新鮮で身の引き締まる思いを感じていたのは確かです。

図書館業務の一つに「配架」という仕事があります。返却されてきた本を所定の場所に戻すことをいうのですが、私はこの仕事が一番好きです。配架をしていると様々な本に出会うことができます。まだ、誰にも貸し出されていない真新しい本や多くの人に何度となく読まれ、色褪せた古びた本。図書館の業務に携わっていなければ出会えなかった本たちばかりです。配架の際にそういった本が詰め込まれた本棚を行き来していると知識という養分に溢れた森の中にいるような気持ちになります。図書館という場所は知識が凝縮された大きな森だと私は思っています。図書館に所蔵されている本、一つ一つはその森を形成するために欠かせない木の役割を果たしています。金谷川の美しい森のように図書館という知識の森がより豊かなものになるように微力ながらその業務に携わっていきたいと思います。

目　次

- 巻頭言「技術と文字情報」…… 高橋　隆行（1）
- 図書館と「情報」のカタチ…… 菊池　壮蔵（2）
- 「FUKURO_フクロウ_」学内教員研究成果の紹介
  『音環境の政治的正しさをめぐって』…… 永幡　幸司（4）
- 海外の図書館事情～ドイツの文書館～…… 森　良次（5）
- 図書館新着情報…… 利用者サービスチーム（5）
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
  『核兵器と日米関係』…… 黒崎　輝（6）
  『ラットを用いた記憶課題による脳内コリン作動性神経系の機能の解析』…… 筒井　雄二（6）
  『連結財務諸表：要説』…… 吉田　智也（6）
- こんなものがあったのか！『怖い絵』 …… 泉田絵美子（7）
- カウンターの内側から…… 赤井めぐみ（8）